

ルールメイカー育成プロジェクト

～ルールを学び、対話的に問題解決する力を育む実証事業～

令和元年度実施報告

1. 事業概要

KATARiBA
Shape the Future

学校における校則やルールなど「変えられない」と思い疑ってこなかったものを題材に、生徒・先生・保護者などが対話を重ね、その存在意義や捉え直しを民主的に行い、課題発見、合意形成、意思決定をする力（市民性”シティズンシップ”）を育むことを目的とした探究的な学びのプログラムです。



理想の学校生活に向けて
必要なルールを考える



関係者と対話や調査を重ね
納得解をつくりあげる



実際に運用し、関係者全員で
改善をすすめる

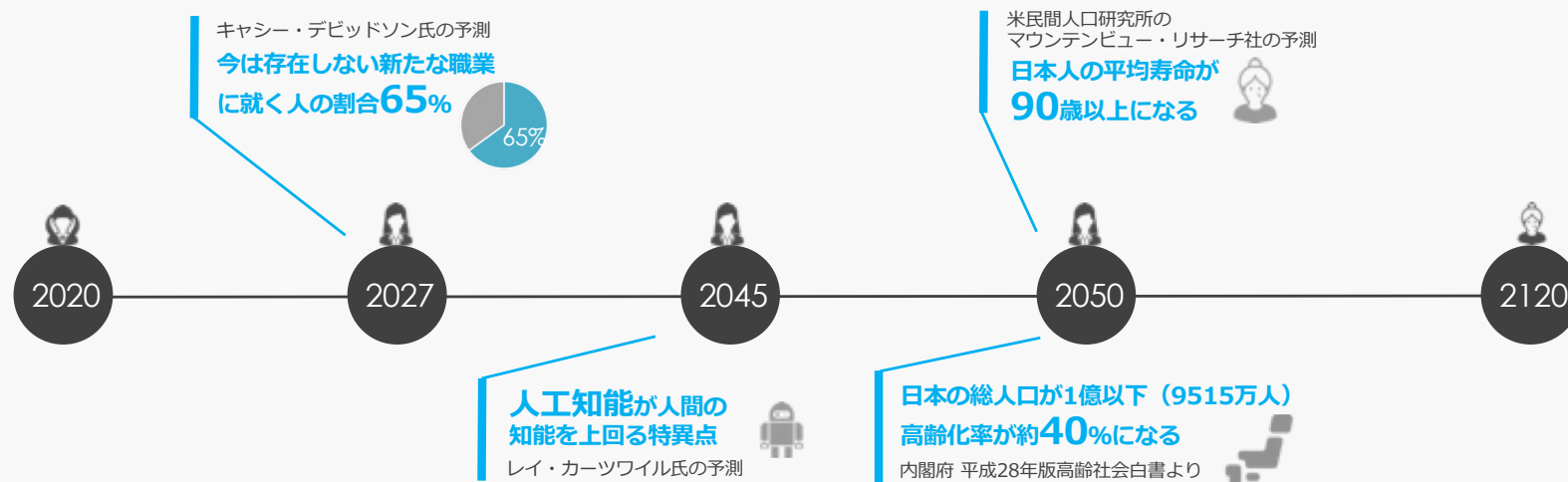
対話的・民主的な合意形成のプロセスを経て、生徒たち自身が当事者として学校・保護者・地域などと協働して校則やルールを変えていくことで、「自分たちの環境は自分たちでつくる」経験を積むことを応援するキャンペーンです。

背景1

予測不能な未来を生き抜く力が全ての若者に必要

社会は複雑化し、若者を取り巻く環境はこれまでの当たり前が通用しないほど急速に変化している。予測不能な未来を生き抜く力（課題発見力/合意形成力）が全ての若者に求められています。

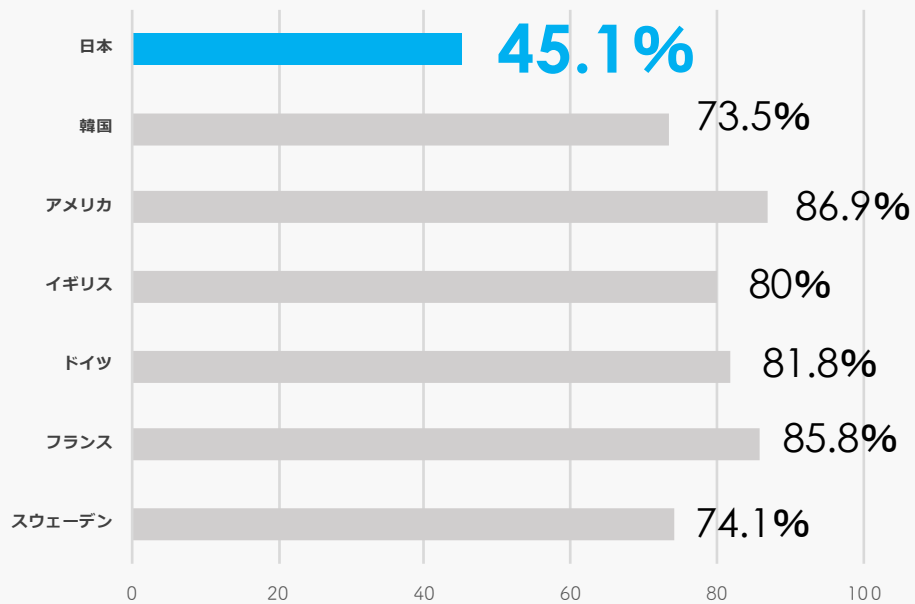
▶ 予測不能な未来



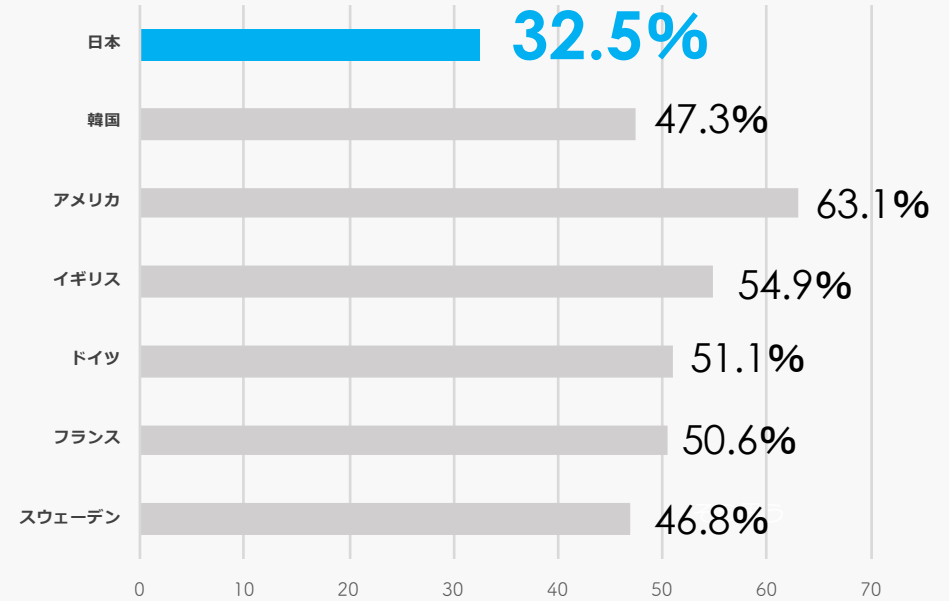
背景2

自己肯定感が低い、意欲を持ってない日本の若者

私は、自分自身に満足している



私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない



出典 | 令和元年 内閣府 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査

背景3

学校への参画が、市民性を育む（海外での研究の蓄積）

- ・ 「生徒会（役員）活動への参加経験」
→ 成人後の投票や市民参加を促す効果
(Verba et al. 1995, Homana 2018)
- ・ 「学校的意思決定への参加の自信」
→ 政治参加の意欲に影響
(Torney-Purta et al. 2001)
- ・ 「民主的な学校風土」（学級での意見表明の奨励や学校的意思決定への参加など）
「教員の公平性」（校則の公平性を含む）
→ 市民参加への意欲に影響
(Lenzi et al. 2014)

背景1 ▶ 予測不能な未来を生き抜く力が全ての若者に必要

背景2 ▶ しかし、自己肯定感が低く、意欲を持ってない日本の若者

背景2 ▶ 学校への参画が、市民性を育む（海外での研究の蓄積）



高校生にとって身近な学校の校則やルールに焦点を当て、生徒たちのシティズンシップを引き出し、課題解決・価値創造をしていく力を育むプログラムを開発・実施します。

「ルールとはなにか？」

「不平不満でなく、解決すべき課題とはなにか？」

「多様な立場の意見を聞き、協働し、納得解をつくるには？」

プログラム終了時に、生徒たちは上記の問いに対して自分なりの解を持てる状態になっていることを目指しています。

目指す3つの成果

- ①生徒たちの思考・行動変容
- ②教員・保護者の思考・行動変容
- ③生徒の声が尊重される学校風土/生徒・教師・保護者の新しい関係性

従来の校則

生徒がルール策定の意思決定に参画していない

- ・一律管理に主眼をおいた制約としての位置づけ。
- ・時代や社会の変化に合わせた改定プロセスもないことが多い。
- ・生徒に参画機会があることを意識するものでなく、定められた規則として認識。
- ・校則を通じた民主主義精神、市民性の育成などはほとんどおこなわれていない。

未来の校則のありかた

より良い学校生活のため、校則やルールの見直し、改善に生徒も参画できる

- ・学校の課題を、当事者として向き合い、解決していくことが当たり前。
- ・生徒たちだけでなく、教員や保護者にとっても納得いくものをつくりあげるシティズンシップ教育の機会にも。

**生徒が主体的にルールをつくる過程で生まれる
成長・教員や保護者などの変化を追う**

全体企画/コーディネート



NPOカタリバ

プロジェクトパートナー

古瀬ワークショップデザイン事務所

古瀬ワークショップ
デザイン事務所
古瀬正也氏



大江橋法律事務所
山本龍太郎氏
浅利美幸氏

※社会課題解決を目的にした弁護士ネットワーク

評価・研究協力

大阪国際大学短期大学部
准教授
古田雄一氏

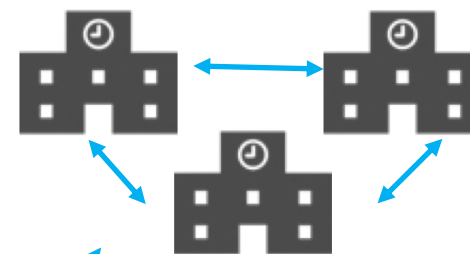
発信協力



デザイン事務所エトピリカ
玉利康延氏

プログラム提供
評価の実施

都市/地方や学校種別、学力など、
多様な学校を対象に選定



モデル校

国内外の先進事例校の生徒と
Onlineでディスカッション

先進
事例校

先進
事例校

先進
事例校

2. 事業実績

1-1. プログラム検討会（令和元年11月2日）

モデル校（安田女子中学高等学校/新渡戸文化学園）で実施するプログラムについて
教員・弁護士・研究者などが集まりディスカッションする検討会を実施した。

▶全体で目指す方向性、学校現場の抱える壁をキャッチアップした

- ① 校則やルールを見直す構造やプロセスが不透明
- ② 小学校・中学校・高等学校で、校則やルール、指導が異なる
- ③ 保護者の中に厳しい指導等を期待する声がある
- ④ 明文化されたルール（校則）と明文化されていないルールが存在する



▲参加人数 17人
（教員6名、弁護士2名、事務局9名）

1-2. 未来の学校ルールメイキングワークショップ（令和2年2月23日）

教育評論家・荻上チキさん（著書：ブラック校則: 理不尽な苦しみの現実）をゲスト講師に迎え、校則やルールに関する現状理解や向き合い方についてレクチャー、ワークショップを通じて検討した。

全国から公募した約30名の高校生・高校の教員・保護者により実施。

▶ 専門家と当事者とともに、校則やルールとの向き合い方を整理

- ① 教員と生徒、保護者が対等に参加し、対話する
- ② 誰もが校則やルールを見直せる状態をつくる、更新性を担保する
- ③ 校則やルールの「理念」や「目標」から点検する



▲参加人数 36人
（高校生14名、教員10名、保護者6名、事務局6名）

2-1. 教員×保護者 ルールメイキングワークショップ（令和2年1月18日）

生徒主体での学校づくり（広義のルールメイキング）をしていくための、土壌づくりの一環として教員、保護者向けにワークショップを開催した。既存の学校ルールで残していくもの（伝統）・変えていくものを整理し、変えていくものに対して教員・保護者でどう課題解決していくかを議論。

▶ルールを見直したための指針を確認した

- ① 課題解決に向けたチームメンバーには、3者（生徒・教員・保護者）がいること
- ② 課題解決に向けた議論の様子が開かれていること



▲参加人数 34人
（生徒6名、教員10名、保護者12名、事務局6名）

3-1. ルールメイキングプロジェクトキックオフ（令和元年12月21日）

生徒・教員それぞれが校則、ルールについてどのように捉えているのかを把握する、またプロジェクトの進め方について検討するワークショップを開催した。

▶学園で目指す方向性、学校現場の声をキャッチアップした

- ① 生徒・教員ともに、おかしな校則やルールについて意見を持っている
- ② 校則やルールを「変えられる」という実感・手応えが持てない
- ③ 誰も排除されない「検討」「見直し」の動きにしていきたい



▲生徒向けキックオフ 参加人数 20人
(生徒12、教員2名、弁護士1名、事務局5名)



▲教員向けキックオフ 参加人数 15人
(教員9名、弁護士1名、事務局5名)

3-2. 生徒会「ルールメイキング・キャンペーン」プロジェクト (令和2年2月5日/2月10日/2月19日/2月26日)

関心の高い一部の生徒や教員による活動にならないためにしたいという現場の声から、校則やルールの見直しを本格始動させる4月より前に、生徒会主導による「ルールメイキング・キャンペーン」を実施することになった。教員や事務局の対面・遠隔（オンライン）サポートのもと、キャンペーンアイデアや立案や実施準備を行った。

▶ルールメイキング・キャンペーン

- ① 掲示板（校則掲示、意見提出） ② 意見箱の設置 ③保護者への発信/意見収集



▲プロジェクト体制 参加人数 23人
(高校生14名、教員2名、弁護士2名、事務局5名)

3-3. 全教員 ルールメイキングワークショップ（令和2年2月6日）

全教員を対象にしたワークショップを開催。各教員が校則やルールについての理解を深めるとともに、校則やルールについてそれぞれが感じていることを出し合い、見える化、共有した。

▶個々の教員の声キャッチアップした

- ① 時代の変化に合わせて、校則やルールを見直す必要性を感じている
- ② 守りたい「伝統」としての校則やルールも存在する
- ③ 検討するプロセスが透明で開かれている状態をつくる



▲参加人数 85人
（教員76名、弁護士2、事務局7名）

2-4. 効果測定のための事前アンケートの実施

『本校の概要』募集 学校に関する事前アンケート

このアンケートは、「本校の概要」募集（当該募集による学校のホームページ）において、学校の概要を掲載し、今後のプログラム等の概要と合わせてお送りいたします。アンケートの結果は、学校内で集計を中心として集計結果を、当該アンケートを募集したプログラム等に活用させていただきます。ご参加からご返信ですが、より良いプログラム等のために、ご返信が望ましいとお願いいたします。

1. 年齢を教えてください。（1つだけ選択）

20代 - 30代 - 40代 - 50代 - 60代以上

2. 以下のそれぞれの項目について、あなたのお考えに最も近いものを選択し、○を打ってください。

	とても いい	まあ まあ いい	まあ まあ 普通	まあ まあ 悪い	とても 悪い
[1] 最近、生徒の学力が上がっている。	3	2	3	4	5
[2] 学校をより良くするために、生徒の意見を聞くことは大切だ。	3	2	3	4	5
[3] 学校の1日、勉強上、卒業生以外一人一人が頑張っていると思う。	3	2	3	4	5
[4] 卒業のめざす、校則や学校のルールを間違えてはいない。	3	2	3	4	5
[5] 安田女子中学の校風は良いと思う。	3	2	3	4	5
[6] 安田女子中学のホームページの更新が早い。	3	2	3	4	5
[7] 安田女子中学の校風は、生徒の成長を助けていると思う。	3	2	3	4	5
[8] 安田女子中学の校風は、生徒の心を元気にしている。	3	2	3	4	5
[9] 安田女子中学の校風は、生徒から信頼されていると思う。	3	2	3	4	5
[10] 卒業は、安田女子中学のことも誇りに思っている。	3	2	3	4	5
[11] 卒業後は、安田女子中学に期待を持っていると思う。	3	2	3	4	5
[12] 卒業後は、安田女子中学の職員を信頼していると思う。	3	2	3	4	5

3. 安田女子中学の教育方針、校風はどのようだと感じると感じますか？

4. 先生からご覧になって、安田女子中学の生徒さんには、どのような生徒さんだと感じますか？

▲先生向け事前アンケート

5. 安田女子中学の校風やルールで、違和感を感じつつも、喜ぶ点があると感じますか？

（可能な場合は、なぜそう思うのかについても教えてください。）

* 編集上、プログラム（当該募集による学校のホームページ）を通じて、生徒にとりよりに感じてほしい点と、校風やルールとがズレていると感じる点があれば、お知らせください。また、学校に伝えてほしいことや気づかされていることなどがあれば、お知らせください。（1つは必ず必ず）

アンケートお礼です。ご協力ありがとうございます。

学校や社会に対する意識調査

このアンケートは、生徒の皆さんが学校や社会に対する意識について調査するためのものです。ご回答は全て匿名で行われますので、皆さんの考えや意見が安心して、安心してご回答ください。

1. はじめに、あなた自身の学年を教えてください。（1つだけ選択）

中学1年 - 中学2年 - 中学3年 - 高校1年 - 高校2年 - 高校3年

2. 以下のそれぞれの項目について、あなた自身の考えや感じている点に最も近いものを1〜5から1つ選び、○を打ってください。

	とても いい	まあ まあ いい	まあ まあ 普通	まあ まあ 悪い	とても 悪い
[1] 安田女子中学のことが好きだ。	3	2	3	4	5
[2] 安田女子中学の校風は良いと思う。	3	2	3	4	5
[3] 安田女子中学のホームページは良いと思う。	3	2	3	4	5
[4] 安田女子中学の校風は、生徒の成長を助けている。	3	2	3	4	5
[5] 安田女子中学の校風は、生徒の心を元気にしている。	3	2	3	4	5
[6] 安田女子中学の校風は、卒業生以外一人一人が頑張っていると思う。	3	2	3	4	5
[7] 安田女子中学の校風は、卒業生以外一人一人が頑張っていると思う。	3	2	3	4	5
[8] 卒業のめざすルールを間違えてはいない。	3	2	3	4	5
[9] 安田女子中学の校風は、卒業生から信頼されていると思う。	3	2	3	4	5
[10] 卒業後は、安田女子中学のことも誇りに思っている。	3	2	3	4	5
[11] 卒業後は、安田女子中学に期待を持っていると思う。	3	2	3	4	5
[12] 卒業後は、安田女子中学の職員を信頼していると思う。	3	2	3	4	5

アンケートお礼です。ご協力ありがとうございます。

▲生徒向け事前アンケート

3. 事業成果

2. キャンペーンサイト

ルールメイキングの始め方、モデル校の変化やそこでのティップスを整理し発信する教育関係者向けWEBサイト。



URL : <http://rulemaking.jp>

3. 安田馨さん（安田女子中学高等学校 校長補佐）

本校は広島に位置する女子校で「柔しく剛く」の学園訓に基づく人間教育を重視しており、正門前での一礼や授業開始前の静座など、他校にない特色を持ち、そのことを誇りとしている。100年を超える伝統があることから、外部からも「伝統を大切にしている学校」としての評価を得ている。一方で伝統があるが故に変えにくい部分があり、一部のルールが硬直化しているのではないかとの課題意識から見直しを検討するタイミングでルールメイキングのプロジェクトを知る機会があり、その趣旨に共感し連携することとなった。

この半年の間に複数回の教員向けワークショップ実施し、生徒会の生徒とのワークショップやミーティングも複数回実施することができた。教員向けワークショップでは、課題意識の共有と本プロジェクトの理解を深めることを目的に行ったが、教員同士もいくつかのルールについて違和感を持っていること、一方で本校の文化として大切にしたいルールが存在することが明らかとなった。日常ではこうしたルールについて教員同士で話し合う時間は作りやすく、その点において本プロジェクトの価値を感じている。

また生徒会の生徒とのワークショップやミーティングでは、放課後の時間にも関わらず多くの生徒が集まり、高いモチベーションで企画の準備を進めている。自分たちがルール作りに関われることについて、率直に嬉しいという反応もあり、まだスタート段階ながら手ごたえを感じつつある。企画作りのプロセスで本プロジェクトのパートナーの方々とのコミュニケーションをとることも彼女たちにとっては非日常的なことであり、良い刺激になっている。

本プロジェクトを実施するうえで、生徒が「わがまま」に近い内容を出してくるのではないかとの懸念もあったが、現時点では学校の立場やあり方までを考えて話し合いを行っている。今後、教員や保護者など様々な関係者の意見を聞き、話し合いをしていくことで壁にぶつかることも多々あると思われるが、そうした経験も含めて学びとしていけるようにしていきたい。

4. 見えてきたポイントや課題感

「どうせ変えられない」「声を挙げても通らない」このような声が多く聞こえてきた。校則や慣習について調査をする中で、「一度決まったものを変えていく」プロセスが明確に設置されていないことが、学校や生徒のクリエイティビティを発揮する壁となっている。

○校則やルールを見直す、当事者（生徒・教員・保護者）の声を反映するルートや仕組みがない、あるいは明確になっていない

→ 3者で課題について対話を行い、一緒に課題解決していくPBLプログラム化し、生徒会・PTA・学校教員の誰からでも発案して取り組めるものへ。

○当事者が参加していくための丁寧な土壌・風土づくりが必要である

○一部の声ではなく、当事者全員が参加できるプロセスや仕組みが必要である

→別紙、土壌づくりプログラム参照